

# 発話の韻律的特徴と印象の関係

## —あいづちと「ね」の分析を中心に—

山下暁美（明海大学）  
auroralinda@nifty.com

### 1. はじめに

対人コミュニケーションにおいて、相手との対人関係をなるべく良好に保つために、話し手は、意識的あるいは、無意識的にさまざまな調整を行っている。伝えたい事実や意図とともに伝える対人調整情報をここでは、情的コミュニケーションと呼びたいと思う。情的コミュニケーションは、社会的規範や言語文化によって異なるが、2 つに分類することができる。

一つは、終助詞やあいづちなど、表現形式によって代表される対人調整である。表現形式は、文字化することによっても確認が可能である。もう一つは、韻律的な特徴によって伝えられる情報である。韻律的な特徴によって伝えられる情報は、対人関係調整にとどまらず、寸時に話し手の印象にまで影響が及ぶ。話すスピード、間のとりかた、ピッチ、イントネーションなどによっても、心理的な対人調整も伝わる。

日本語教育では、これまで音声を通して行われる情的コミュニケーションにあまり注目して来なかったように思われる。音声も表現形式と同様、選択して使用する必要があるということについてあまり重点が置かれてこなかった。情的コミュニケーションにおける韻律の印象的機能について考えてみる。

### 2. 研究目的

話し手が話すスピードやピッチ、イントネーションなど、韻律的特徴が聞き手に与える印象的機能について対人調整という視点から考察する。音声は、ときに話し手の情緒の状態や年齢、性別、出身地、性格までも相手に伝える。音声が伝達する話し手に関わる情報には、発話意図、態度といったパラ言語的な要素が豊富に含まれる。これらは、話し手が意識的に伝えようとした場合もあるが、伝えたくないと思った情報なのに、韻律的に伝わってしまった情報であることもある。

日本語の非母語話者が習得段階にある日本語で話す場合、伝えたい内容が伝わらない、誤解された、感情的な部分だけが強調されてしまったなど、さまざまな問題がある。文化特有の意味が韻律的に伝わったり、逆に聞き手が予想しない話し手の意図が含まれていたりすることがある。話し手の音声聞き手に与える印象や韻律的特徴に隠された意味を学習していれば、避けられる誤解もあるかもしれない。文法的に正しいだけでは、異文化間コミュニケーションは成立しないといえる。

日本語教育に音声的な指導をもっと取り入れれば、さまざまな感性領域の情的コミュニケーションが正しく伝達され、楽しく有意義な人間関係の構築が目指せるのではない

かと思われる。ここでは、対人調整機能を中心に考察することにする。日本語教育の目的は、正しい日本語を学ぶこと、場面にふさわしい表現ができることも大切であるが、究極的には、より豊かな人間関係の構築にあるのではないかと考える。そのためには、社会にあって言語表現を通してさまざまな問題を解決する能力が要求される。

### 3. 先行研究

学習者が自分の発話をモニターすることによって自分の音声について問題点を知り、問題点を分析し、実感しておくことは、発音を変えるだけではない意味がある。小河原(2009)は、音声教育の目標は正しい発音を教える強制ではないと強調している。つまり、実際のコミュニケーションの場面で、誤解が起きた時の対処法を指導することも音声教育の重要な役割であるとしている。第二言語学習者にとって、日本語母語話者の表現意図や感情を韻律的特徴から認識することは難しい。誤解が生じてそれをどんな韻律的特徴を持って修正すればいいのかについても、第二言語習得では、学習しなければわからないことであろう。

あいづちの定義は諸説あるが、本稿では、メイナード(1994)を参考にする。つまり、あいづちとは、話し手が発話権を行使している間に聞き手が送る短い表現(非言語行動を含む)で、短い表現のうち話し手が順番を譲ったとみなされる反応を示したものは、あいづちとしない。あいづちは、聞き手が話し手に送る反応で、聞き手が、話し手に向かい合っていることを知らせるメッセージである。そういう意味では、談話における終助詞とあいづちは、同じ機能を持つと考えられる。

終助詞「ね」について、杉藤(2004)は、上昇の程度を低めることによって聞き手の反応を求める場合の「ね」から自己確認の「ね」へと意味が移行する。さらに好意的な問いの「ね」と尋問の「ね」を交換した実験では、終助詞のイントネーションが発話全体の意味を支配する場合があることが分かったと述べている。

メイナード(2009)は、大学生の日常会話で終助詞「ね」「さ」「よ」で終わる率は、35%で、言い終わりの3度に1度は「ね」「さ」「よ」で終わる。相手を意識したときに「ね」は、使用されるので、話し手と聞き手の関係と感情が明らかになる部分と言えるとしている。本研究では、聞き手の日本語母語話者や、話し手以外の母語話者が話し手の談話をどのような印象で受けとめるのかに注目している。

文末だけでなく文中にも気持ちを確認する作業が入って、相手への働きかけを強調する。非常に細かい感情を「ね」に込めていて、それによって伝わる心情は非常に大きい影響力を持つとしている。

山下(2010)では、ここでとりあげた2名のインフォーマントの表現形式を中心に、終助詞、あいづち、敬語使用、フォーマルな感じ、アップシフト・ダウンシフトの分析結果について考察した。話者Bは、話者Aにくらべて、敬語使用、あいづち、終助詞の使用回数が多かった。しかし、話者Bのほうが好感度が低くなった結果について、ある一定の丁寧な表現形式にこだわった結果、状況に応じてさまざまな表現形式を使い分けるコミュニケーション能力に欠けていたことが明らかになった。好感度を向上させるためには、丁寧度の高い表現形式だけではなく、状況の変化に応じて使い分ける能力が要

求されることを明らかにした。

#### 4. 研究方法

インフォーマントの談話のうち、あいづちの「はい」と「ええ」、「です・ます+ね」「普通体+ね」の「ね」をすべて抜き出し、ピッチ抽出を行った。そして、「はい」と「ええ」、「ね」の韻律的特徴について、ピッチと長さを測定した。声色といった類の要素が印象に関係していることは否めないが、本稿では含めない。発話の文末が中心になった結果、他者の談話と重畳等により、正常にピッチを抽出できない箇所もかなりあった。これらの箇所は、含めていない。Windows Media Playerによって音声を取りこみ、ピッチ曲線とスペクトグラムによって分析を行った。

本稿では、前述のように日本に定住している日系ブラジル人日本語話者で、日本語学習を継続している2名のインフォーマントを取りあげる。2名は、市の職員として活躍していて、日本語とポルトガル語で生活している。インフォーマントは、話者Aと話者Bと呼ぶ。話者Aは、30歳代の2世の女性である。来日8年で日本語学習歴は4年になる。話者Bは、40歳代の2世の女性で、日本に来て18年である。日本語学習歴は14年である。2名に日本人（話者より年上の女性）と自由に会話をしてもらって、了承を得て音声記録をとった。日本人10名と在日アジア人3名の計13名に、2名の談話について印象を聞いた。「印象がいい度合」をここでは、便宜上、好感度とよんでいる。好感度を5点満点で点数化した結果、話者Aは、4.6点で好感度が高く、話者Bは、3.8点で低い得点となった。山下（2010）では、2名の談話の約10分間を切りとり、談話分析をBTSJ（宇佐美2006）によって行った。そして、終助詞、あいづち、敬語使用、フォーマルな感じ、アップシフト・ダウンシフトの分析を行った。

#### 5. インフォーマントの印象の結果

インフォーマントの音声を聞いて、好感度について回答してもらった際に、好感度の点数のほかに、気がついた点についてコメントも依頼した。その結果、話者Aについては、「なれなれしすぎる」「やさしさが感じられない」、話者Bについては、「なれなれしすぎる」「表現力不足」「敬語を使わない」などのコメントが寄せられた。特に話者Bについて「なれなれしすぎる」という回答が5件あった。

2名とも「なれなれしすぎる」というコメントがあったことについては、終助詞にその要因の一つがあると思われる。日本語の終助詞「ね」は、ポルトガル語の“nãoe”（英語に直訳すると“no is”で、tag question）の縮約形“ne”がその用法と文中の位置が日本語に似ている（山下2007）。そのため、母語干渉を起こしたり、多用の要因になったりしていると思われる。ポルトガル語を母語とする日系ブラジル人は、親しさ、やさしさを表す手段として終助詞「ね」を用いた結果、「なれなれしい」という印象を与えたものと思われる。「ね」は、ポジティブポライトネスの表現の一つと考えられるが、使いすぎると、まだ、聞き手が、話し手との心理的距離がかなりあると感じている場合、親しさの押しつけと感じられてしまう危険をはらんでいる。

話者Bは、話者Aより多く敬語を使用しているにもかかわらず、「敬語を使わない」と

いう印象を与えている。このことについて、話者Bは、文末が「～ですね」で終わるケースが多く、「です」を丁寧語としてカウントした結果、敬語使用回数が多くなった。聞き手からは、「～ですね」以外の、または、それ以上の丁寧度を期待したい部分で「～ですね」であっさり話しているという印象が強かった可能性が考えられる。「～ですね」で簡潔に応答をくりかえす話者Bの言語行動は、「やさしさが感じられない」という印象につながったと思われる。また、円滑なコミュニケーションを保つためのポライトネス・ストラテジーとして言い終わらない表現形式が用いられていない傾向があることも指摘される。

以上は、インフォーマントの音声記録を聞いた回答者のコメントから、話者の表現のうち、いくつかの傾向について述べた。このように、発音、敬語使用などの面でかなり上級でありながら低い評価を受けるということは、上級になればなるほど談話法の指導が必要であることを示唆していると思われる。また、初級から情的コミュニケーションについて導入が必要であろう。

## 6. あいづちの「はい」と「ええ」の分析と考察

あいづちは、情報共有、変化に応じた対応をするうえで、なくては談話を進めることができない。あいづちを聞くことで、話し手は、心が通じ合っていると感じて、さらに談話を継続することが可能になる。あいづちのない談話は、成立しないといっても過言ではない。

話者Aと話者Bのあいづちの「はい」と「ええ」についてその韻律的特徴を分析した。「はい」と「ええ」は、多用されているので、両者とも初出の10回を分析対象にした。「はい」については、イントネーションによっては、話を切り上げようという場合や、「はい、はい」と2度くりかえして確認を強める場合があるが、話者A、話者Bともそのような例は観察されなかった。

話者Aの「はい」のピッチの平均変動幅は、100Hzで、208Hz－308Hzの間に収まった。長さは、平均およそ0.34Sec.であった。いっぽう、話者Bの「はい」は、平均変動幅56Hzで、221Hz－277Hzの間を変動している。長さは、平均およそ0.25Sec.であった。話者Aも話者Bも女性であるから、男性の声にくらべてピッチは高い数値を示した。しかし、変動幅を見ると話者Bは、話者Aの約半分の変動幅になっている。また、長さについても、話者Aのほうが話者Bにくらべて明らかに長い。ピッチの変動幅の大きさは、相手に対して丁寧でやさしい印象を伝えると思われる。相手に対して開放的な印象も与えらる。そして、短い「はい」より長い「はい」のほうが、ゆったりとした穏やかな感じを伝えると思われる。変動幅が広いこと、長いことが待遇性をおびて話者Aの好感度が上がったと考えられる。

「ええ」については、出現回数が「はい」ほど多くなく、客観性を欠くが、「はい」の場合と同じ傾向が見られた。話者Aの変動幅は平均およそ103Hz、長さは、0.41Sec.であった。話者Bの「ええ」は、変動幅が平均およそ47.5Hzで長さは、0.24Sec.であった。

## 7. 「ね」の分析と考察

話者 A と話者 B の終助詞「ね」の分析をしたところ、様々な韻律的特徴が見られた。まず、上昇・下降型 (図 1)、下降・上昇型 (図 2)、長い (ゆるやかなともいえる・相対的な長さを指す) 上昇 (図 3)、長い下降 (図 4) において、話者 A の「ね」の長さは、話者 B より長い。この時間の長さは、聞き手に対する配慮として伝わると思われる。話者 B の「ね」の短さは、確認要求、解答要求、主張、断定と理解されて、好感度が下がったと考えられる。「ね」が短くて測定がほとんどできないような場合が、話者 B に多く見られた。

つぎに、話者 A、話者 B とも上昇・下降型を最も多く使っている。話者 B の「ね」は、話者 A の半分くらいの長さで短い。使用頻度の高い「ね」が短いことが目立ち、話者 B の配慮のなさを印象づけた可能性がある。最も多く使う上昇・下降型では、話者 A、話者 B ともに最高ピッチは、240Hz から 250Hz の間である。ピッチの変動幅は、話者 A の方が大きく、やわらかさを伝えている。

第 3 に、下降・上昇型、比較的長い上昇、長い下降において、話者 A の方が平均ピッチが高い。話者 B は、短い上昇の「ね」を多く使用し、尻上がりイントネーションと受け止められて、初対面の場にふさわしくなく、軽薄と受け止められた可能性がある。話者 B は、かわいさや親しみをこめていた可能性があるが、なれなれしいというコメントも尻上がりに原因があると思われる。

以上、話者 A と話者 B の「ね」の韻律的特徴と機能について考察した。「ね」によって、話者 B は、確認や主張の意味を強調しているように受け止められた。また、尻上がりイントネーションは、好感度にマイナスの要因として聞き手に伝わった。一方、話者 A の「ね」は長く、ピッチの適切な変動幅によって、聞き手にやさしさ、親しみを伝えるのに成功したと考えられる。

## 8. 今後の課題

本稿では、好感度と話題の展開の仕方のじょうず、へたについては、分析対象としなかった。談話の内容がきついなど話題の選択についてや、聞き手の言語規範に起因することがらについても考察が必要であろう。

「ええ」については、ポルトガル語にも“ee ne”というあいづちがあるので、母語干渉の可能性も考える必要がある。ポルトガル語は、韻律的特徴が強弱によっていて、ピッチの変動幅は、日本語にくらべると少ないと考えられる。母語干渉があると考えるなら、高低によるピッチ変動効果や、長さによる情的コミュニケーションについて指導が必要であろう。相手に対する待遇や、配慮が不足していると判断された話者についてフィードバックの機会の与えかたも今後の課題である。

## 参考文献

宇佐美まゆみ (編) 2006 『自然会話分析への言語社会心理学的アプローチ』

(言語情報学研究報告 13) 東京外国語大学

小河原義朗 2009 「多様化する日本語教育における音声教育の目標と教師の役割をとらえ直す」(第 3 部) 『日本語教育の過去・現在・未来』凡人社 pp. 48-69

杉藤美代子 2004 「終助詞「ね」の意味・機能とイントネーション」『文法と音声』IV  
くろしお出版 pp. 280-289

泉子・K・メイナード 1994 『会話分析』くろしお出版 pp. 58

泉子・K・メイナード 2009 『ていうか、やっぱり日本語だよね』大修館 pp. 29-41

山下暁美 2007 『海外の日本語の新しい言語秩序』三元社 pp. 139-142

Yamashita, Akemi 2009 Native and Foreign Communication Standards in Colloquial  
Japanese Language - An Example of Japanese-Brazilian Communication  
Dialectologia3 Spain (FECYT) pp.109-123

山下暁美 2010 「好感度とコミュニケーションスキルー日本語学習者の談話分析による  
ー」『応用言語学研究』No. 12 pp. 139-150

(本研究は、2010年度宮田研究奨励金による研究成果の一部である。)

### 参考資料

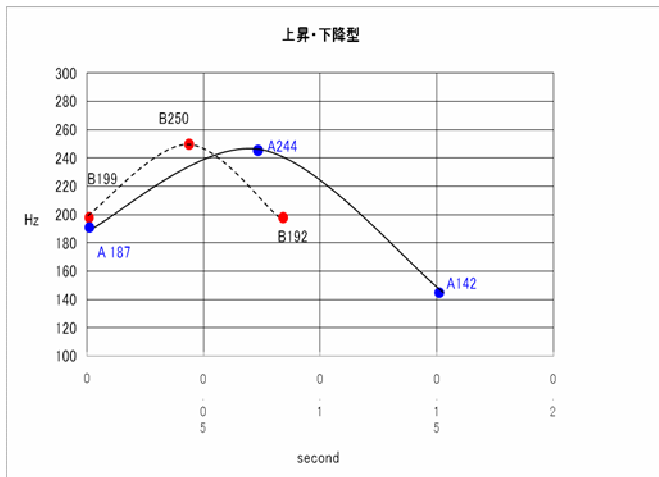


図1 上昇・下降型

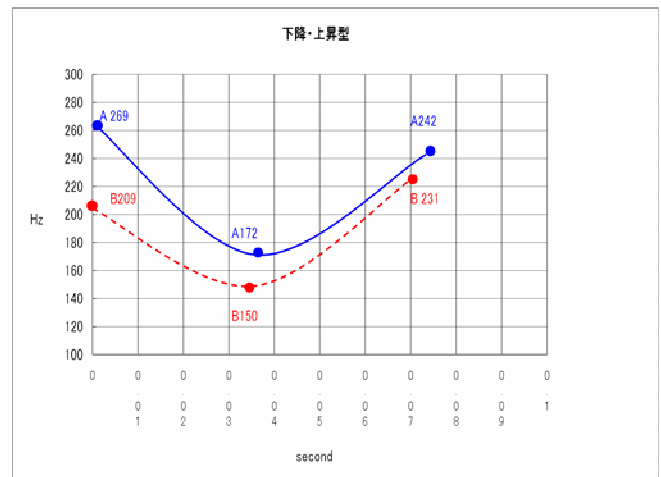


図2 下降・上昇型

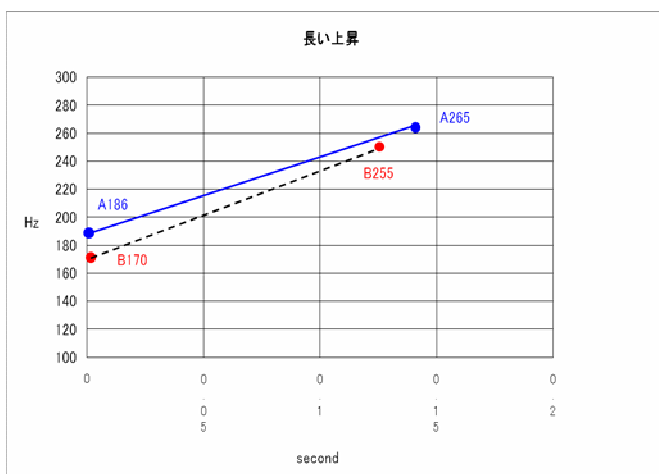


図3 長い上昇

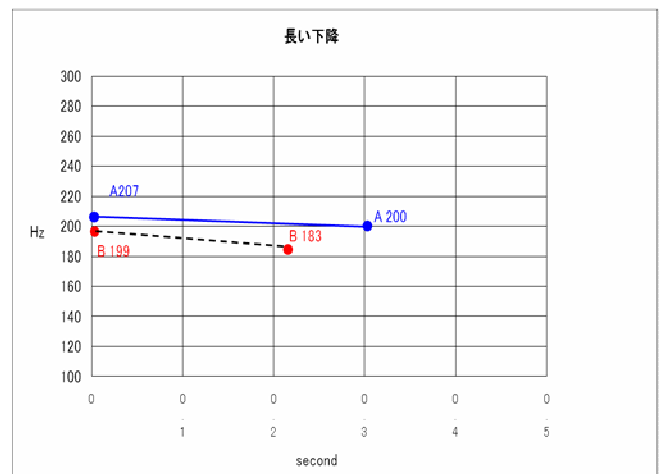


図4 長い下降

(注：以下の4枚のグラフは、Yamashita (2009) で使用したグラフを日本語バージョンに作りかえたものである)